新　春高怪物列伝　下関総体

今年の OB と新入生懇親会は、秋本久治さん（11 回）のスピーチをきっかけに少年たちが沸きかえった。
「新入生のみなさん、このおじさんたちの中にはね、インターハイで勝って、日本記録も出して、箱根も勝った先輩たちがいるんです。今日はその人たちに話を聞きましょう！はっはっはっ」

かくいうこの先輩も、高校総体の覇者であるのは言うまでもない。

★関東大会で赤シャツ席巻

１９４７年新制高校総体に変わっての第１回関東高校選手権で、春高はリレー含み延べ１２人がインターハイへの切符をつかんだ。初回から大活躍だ。

春高は毎年のようにインターハイで入賞者を輩出。
迎えた１１回関東高校では、ついに１９人もの入賞を誇り、総合４連勝。
まさに赤シャツ軍団は関東大会を席巻していたのだ。
今も OB 総会に毎回来て下さる面々だ。

埼玉県ジュニア選手の近況

写真は春日部高等学校の秋本久次選手の円盤投げフォーム。ターンに移るところ。同選手は本年すでに46ｍ59を投げており本年中に高校記録を更新するものと期待される有望選手です。
（昭和33年　下関Ｉ　Ｈ優勝＝47ｍ29）

第１１回関東高校対抗選手権大会

100	②	11.3	大木　茂男
200	①	23.0	大木　茂男
400	③	53.4	針ヶ谷哲夫
110H	②	16.4	山野井長治
110H	③	16.4	大木　茂男
200H	②	27.4	山野井長治
４×２００		①1.35.9	兼子、針ヶ谷 助川、大木
走幅跳	②	6.68	石井　弘道
三段跳	②	14.33	石井　弘道
砲丸投	①	13.52	秋本　久次
円盤投	①	44.94	秋本　久次
円盤投	③	38.43	金子　信夫
やり投	①	53.91	佐藤　政宏

やり投　④　　46.98　中村　孝夫
保投　　②　　49.90　折原　悦夫
保投　　⑤　　46.83　関根　　侑

昭和33年　学徒大会４連勝、関東優勝、関東大会４連勝、
インターハイ６位、フィールド優勝

★円盤投げ優勝候補筆頭として

１９５８年　第１１回インターハイは　山口県下関で開催された。
この大会からインターハイは三日間開催になったが、実際にはフィールドの予選を少し行うだけで、二日間開催に大きな変化はなかった。

春陸は２０人以上で臨んだこの大会、関東の覇者らしく総合入賞と個人タイトルを狙った。インターミドルで橋本先輩が円盤投げ、インターハイ第５回で後藤先輩が砲丸投げで勝っている。３人目の高校チャンピオンを輩出すべく関根監督は狙っていた。

かねてから秋本久治先輩は全国での優勝候補として関東大会でも順当に投擲二冠を獲得。

▲5度目の女子総合優勝を飾った光華

◀男子円盤投は，秋本久次（春日部）が優勝

総体でも、実に堂々たる投げっぷり。

１９５４年にマークされた橋本 宣（７回）先輩の持つ埼玉県高校記録を大きく更新する４７ｍ２９をマークして圧勝を飾った。

この大会では三段跳びで１４ｍ８２という大記録で石井　弘道先輩も準優勝。
１００ｍでは大木茂男先輩が６位入賞している。

この３人によって春高は総合６位。
フィールド部門優勝を飾った。
旧制中学時代、橋本　純先輩　円盤投 29m13（優勝）竹村保正先輩　走幅跳 5m88、田中　猛先輩　槍投 41m38（ともに４位）山本隆通先輩　400m 55″5（５位）ら屈強なメンバーで京都西京極においてインターミドル５位以来の総合入賞となって以来である。

★総合６位　３人の怪物

秋本先輩の全国制覇に注目しがちなのは仕方ないが、石井先輩と大木先輩の競技も素晴らしい。

石井先輩の三段跳び１４ｍ８２という記録も、とんでもなくすごい。現在でも関東なら余裕で表彰台に登れる記録。
何よりも重大な要素が「土のグラウンド」であるということ。
土とウレタンゴムの両時代の経験者である梶先輩（現 OB 会長）は言う。
「ゴムの走路は全く別物だよね。トランポリンみたいにバネが入っている感じ。幅で３０ｃｍ、三段なら７０ｃｍ以上伸びるんじゃないかな・・・」と。
現在でいうと１５ｍ３０くらいというところか・・・

練習や器具によって年代的記録が異なるのは当然。特に短距離、跳躍は顕著だ。
だから石井先輩の跳躍は、わかりやすく「インターハイで１位と１ｃｍ差の２位。」と表現したほうが簡単だろう。全国２位というスーパーなものであるということだ。
何十年前であっても、全国二位は、現在でも二位相当の力ということに変わりはない。

ちなみに２００６年の大阪インターハイ。後藤乃毅が１００ｍで勝った総体だが、この時の三段跳びの入賞は１４ｍ５８ｃｍである。

昭和33年　山口インターハイ
秋本　久次（第13回卒）円盤投優勝（＝左）
大木　茂男（第13回卒）100ｍ６位（＝中央）
石井　弘道（第13回卒）三段跳２位（＝右）

石井先輩は高校１年生から関東で幅跳びで入賞し、インターハイ出場を果たしている。おそるべき身体能力である。

そう考えると、いまだ破られる気配すらない大木伸夫先輩の三段跳び（土トラック）春高記録は恐ろしい。
いずれ新　怪物列伝でふれてみたい。

★大木３兄弟伝説

私の中では、言わずもがな・・・であるのが天才「大木３兄弟」。
しかし先述したように、昨今の少年たちは活字でしか知らないであろう春高の怪物。
大木兄弟と後藤兄弟、春高陸上における、この驚異的血統の神話はぜひとも知っておいていただきたいものだ。我らの先輩なのだから

大木茂男先輩（１１回）は、高校１年生にして「才能の種目」である１００ｍで、一学年先輩にあたる小原俊彦先輩（１０回・我々の監督）と二人で、関東入賞を早々に決め、インターハイへ二人で出場している。小原先生と走った８００ｍR でも春高は優勝。
大木さんはさらに２００ｍでも優勝を飾って鮮烈なデビューを飾った。
そして関東総合２連覇。

高校１年生で関東２冠（２００ｍ、８００ｍR)、３種目でインターハイ・・・石井先輩同様、その怪物っぷりは異彩を放っていた。

翌年の第１０回関東も１００ｍ、２００ｍ、８００mR で入賞し（小原先生１走者)、インターハイ出場を決めている。
関東総合も３連覇。

翌１１回関東が、先述した１９名の入賞を誇る大量得点での関東総合４連覇である。

我が先輩たちとはいえ、すさまじい攻勢だ・・・関東大会を赤シャツが圧倒したことだろう。
まさに「赤き疾風」の原点である。

大木茂男先輩は、その勢いに乗り緩むことなくインターハイでも爆走した。
３年連続で１００m、２００m、リレーのすべてのインターハイに出場しているが、いまだ入賞はない。
最後の挑戦になる１００ｍに勝負をかけた。当時、写真判定もなく、１/１０秒掲示であるため同タイムは極めて大勢いるだろう。決勝に残るのは着順と組み合わせという運にも左右される超難関種目。

みごと決勝に残った。

そして６位入賞。やった！！春高初の１００ｍ全国入賞。新制総体になって、酒井　昇先輩らも幾度となく挑んだ１００ｍ全国の決勝への道。やっと１１回目にして悲願がかなったのだ。
私は１００ｍが最もナーバスで、本番でベストを出すのが難しい種目だと思っている。３回の試技（チャンス）があるわけでもないし、出だしの３秒でリズムを乱したら取り返しが利かないからだ。

大木茂男先輩の春高史上初１００ｍ入賞。**ここから大木３兄弟伝説が幕を開ける。**
詳細は　新　怪物列伝で・・・

★競技はたのしく・・・

春高の円盤上げで全国を制した選手は現在３人。
インターミドルの橋本　純さん、インターハイの秋本久治さん（１１回)、国体の瀬上裕司（３７回）である。
この３人に共通するのは「しなやかな長身」であること。
ベンチプレスで１００Ｋｇをガシガシあげるような太マッチョではない。どの選手も「す

ばらしいフォーム、高校生離れしたスピードターン」と新聞に評された。
やはり速く動く筋肉、不動の軸回転、というところか・・(もちろん超一流の体バランスあっての話)

懇親会で田中　芳輝さんや西村　暢二さんが言っていた。「(秋本さんは) 脚が長いんだよ。身体も細くて高跳びの選手みたいだった。４００ｍも速かったんだ」・・・

実際に短距離選手なみの速さもあったと先輩たちが言っていた。
そういえば後藤　均先輩（５回）は「投擲は脚が遅くてはだめだ。身体の基本の足腰が弱くては投げられない。ウエイトトレーニングが流行ったが、上半身だけヘラクレスになってもだめなんだ」・・・と力説していたのを思い出す。

そういえば瀬上もひときわ細かった。試合のたびに周囲からそう言われた。いっしょにインターハイの円盤投げ決勝選手控え所に行くと、強面のプロレスラーのような巨漢選手がゴロゴロいて、「うわっ怖えー」と私がふざけた事を思い出す。

高校時代が終わって、砲丸も７．２ｋｇに、円盤も２ｋｇにもなると、全く別の重さなので体の大きさ体重も要されるのだろうが・・・

秋本先輩は晩年まで三郷陸上クラブでの選手育成に尽力する。
高橋萌々子選手が代表される。彼女のように球技をやっているが走ってみたい・・・という希望を花開かせてあげるのだ。その結果、高橋萌々子選手はソフトボール部にいながら、その才覚を発揮し、全日本中学で活躍。それが萌々子選手の、今日の業績の原点になったわけだ。
競技は楽しく・・助言はするが、やってみたい事をやったらいい。その中で大きな可能性が生まれるし、自由にやらせれば失敗も成功も本人が多くを学ぶ・・・という事だろう。

御大・関根監督も、「お！君はこの種目が向いているんじゃないか？」・・・と特性を見ぬき、あとは個々の望むようにやらせてあげるスタイル。そうやって選手の無限の可能性を引き出す名伯楽なのだから。

筆　３７回　野本